

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

特集

いま、倉橋と出会う1

「こころもち」

1

2010



環境教育実践

～ 未来へのとびら～

大澤 力/監修 栄光学園・岡田勝彦/著

自然に感謝し、地球を守る人づくり

子どもを取り巻く環境に、幼児教育の答えがあります。自然や人、社会とつながり、共に生き・生かされている感性を育むもの、それが環境教育です。本書では、「自然・環境あそび」「エコライフ」「エコ活動」の 카테고리別に、活動案を豊富に掲載。園から家庭へ、家庭から地域へ、地域から地球へ…。地球を守る人づくりを進めましょう！

26×19cm 96ページ 定価1,890円(税込)

10744



未来へのとびら
環境教育実践

環境教育実践



▲楽しい活動が満載！



▲イラストと写真でわかりやすい構成



▲10年来の環境教育実践をまとめた入門書

Contents

- はじめに
- カラー口絵 自然に感謝し、地球を守る人づくり
- 第1章 子どもから地球を変える
～地球環境問題は人づくりから～
- 第2章 自然に感謝し、地球を守る
～環境教育カリキュラム～
- 第3章 これからの環境教育
～未来へのとびらを開けよう～
- おわりに

キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第109巻 第1号

目次

● 巻頭言 ●

「子どもの発見」に込めた思い 堀尾輝久 4

新

● 特集 ●

いま、倉橋と出会う 「こころもち」 8

「こころもち」に近づくために 浜口順子 9

◆ インタビュー ◆

「こころもち」—その人の、その時 津守真・津守房江 12

「こころもち」にふれて応える 嶺村法子 18

新

● 保育の創意工夫 (1) ●

大人の枠組みの解体 前原寛 24

最終回

● ツブキ先生の虫のつぶやき (4) ●

冬に虫はいるのだろうか? 津吹卓 28

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

第109巻 第1号

新

- 幼稚園の源流を求める旅 (1) ●
エリザベス・ピーボディーのボストン 国吉 栄 32

- ひととき (3) ●
わたしのお気に入り 藤井砂緒里 36

- 一緒につくる 谷田部高子 38

- 「幼児の教育」 ネット公開に寄せて (13) ●
戦時下の「幼児の教育」 米田俊彦 44

新

- あの町この街 ●
雪国の幼稚園から 肥田野 豊 50

- 保育の現場から ●
音を刻む・思いを刻む 佐藤寛子 52

- お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (37) ●
「クラゲス輪読会」が与えてくれたもの 佐治 恵 58

卷頭言

「子どもの発見」に込めた思い

堀尾輝久

皆さんは「子どもの発見」という言葉を聞いて、どんな思いがするでしょうか。

初めての子どもを胸に抱く母親は、たつぷりとお乳を吸って眠りにつこうとする子ども顔を、ただ、うっとり眺め「幸せ」を感じている。

いや、離乳食を始めたばかりの子どもは、おなかがすいているのに、目の前のおさじを手で払って泣き叫び、母親の顔つきもだんだんけわしくなっていく。

保育園では、母親から引き離されて泣いている子が、一歳年長の子がそばに寄って何か声かけをしてくれると、びたりと泣きやんで、ニコニコし始める……。

「子育てって大変だなあ、でも子どもっておもしろいなあ、見ててあきないよね」「これって「子どもの発見」っていうことなのかなあ」でも、なぜ「子どもの発見」などと大げさな言葉がでってくるのだろうか。子どもからすれば、おむつが不快になれば、替

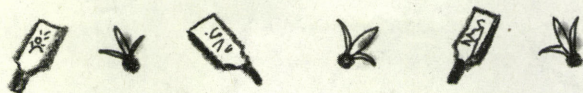


えてほしいと泣くし、「ねえねえ」と言えば、「どうしたの」とふり返ってくれる親（大人）がいてくれれば満足、安心なのだけど……」。

皆さんはJ.ルソーの『エミール』をご存じだと思います。この本は教育を考える人にとつての古典ですが、その序文には、この本は「ものを考えることのできるよき母を喜ばせるため」に書き始めたとあり、さらにこんな言葉があります。「人は子どもというものを知らない。子どもについてまちがった観念をもっている。……彼らは子どものおちにおとなをもとめ、おとなになるまでに子どもがどういふものであるかを考えない」子どもとは何かを問い、子ども時代（期）を具体的に記述したこの本が「子どもの発見」の書といわれる理由もおわかりでしょう。J.ペスタロッチやF.フレーベルもその影響を強く受けた思想家であり実践者でした。

そのころ、多くの詩人たちも子どもをたたえる詩を残しました。よく知られているW.ワーズワースの「子どもはおとなの親である」という一節にも「小さなおとな」観を逆転させる深い思いが秘められています。

それから少し後の時代になりますが、これも皆さんがよく知っているV.ユーゴーという作家・思想家は「コロンブスはアメリカ大陸を発見したが、私は子どもを発見した」という言葉を残しています。ご存知の『レ・ミゼラブル』も、そのつもりで読み直してみれば、当時の社会、労働者や女性と共に、子どもたちがどのような生活をしているか、街をさまよう家のない子どもらの寂しさとたくましさを、彼は書き留めているの



です。「子どもの権利」という言葉をフランス語で最初に使ったのはユーゴーだという研究もできています。そういえば、C.デイケンズの『オリバー・トゥイスト』も発展途上の資本主義社会の中の子どもの発見の書ともいえるのではないのでしょうか。

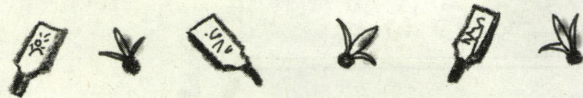
二〇世紀は「戦争の世紀」ともいわれますが、それだけに人々が、改めて平和と子どもに目を向けた時代でした。一九〇〇（明治33）年に出版されたエレン・ケイの『子ども世紀』は、その意味で象徴的です。新教育の思想と運動も、新たな、子どもの再発見と子どもの権利の思想の運動でもありました。J. デューイ、M. モンテッソリー、L. ヴィゴツキー、J. ピアジェ、H. ワロンなどの仕事を想起すれば、そのイメージがわいてくるでしょう。

それでは現代は子どもの世紀になったのか。とてもそうはいえません。世界に目を向ければ、多くの子どもたちが、戦争や暴力、そして飢餓の中で苦しんでいます。

とりわけここ数十年間、グローバルゼーションの名のもとに進められてきた新自由主義政策は、国と国の格差を上げ、豊かな社会も格差社会となってきました。

それでは、豊かさを満喫しているかに見える人々の家庭と子どもたちの生活は、果たして本当に、豊かといえるのでしょうか。

生まれた時から競争社会に投げ込まれ、習いごとを押しつけられ、勉強勉強と追いつてられ、テレビ文化は大人と子どもの境い目をとり払い、子どもは自然の中で、自由な遊びの中で、好奇心の塊のように活動し、学びとり、その世界を上げ、時に空想の世界



に遊び、空飛ぶ自分を夢みるようなゆとりを失っているのではないでしょうか。「空にすわれし十五の心」(啄木)はどこにいつてしまったのでしょうか。「子ども期の喪失」という表現が、アメリカでも日本でも、現代社会の貧困と子どもの権利の侵害を特徴づける言葉になっているのです。

戦争や貧困が子どもたちの未来を奪うことは明らかです。一見、豊かに見えても、現在を未来への準備としか考えない、前のめりの競争主義は、子ども期の充実を犠牲にすることによって、未来をも貧しくしているのです。

二〇〇八(平成20)年の十月、「九条の会」に呼応して「教育・子育て九条の会」が発足しました。「戦争は人の心のうちに生まれる」(ユネスコ憲章)とすれば、平和こそ人の心のうちに深く根をはらねばなりません。無知と偏見をなくし、互いに認め合い、敬意を払い、対話を交わすことが重要です。子どもを尊敬すべき存在だと感じ、愛情と敬意のまなざしをむけ、その要求に耳を傾け、受容し、応答する関係をつくるのが何より重要です。子どもは安全で安心できる、平和的で文化的な環境の中で子ども時代を過ごし、ゆったりと成長することが保障されねばなりません。

子どもは人間である。子どもは子どもである。子どもは成長発達し、現在の大人をのり超える存在である。子どもは欲求・要求表現(権利)の主体である。一見陳腐に見えるこの子ども観を豊かに肉づけする思想と実践と運動が求められているのです。

(東京大学名誉教授)

倉橋惣三（一八八二—一九五五）は子ども・保育研究の先駆者であり、日本の就学前教育における遊び児童中心主義を確立したといわれる。主著書に『幼稚園雑草』『就学前の教育』『幼稚園真諦』『子供讃歌』などがある。大正期から戦後にかけて、本誌の編集主幹を長く務めた。没後五十五年を迎える今年、特集「いま、倉橋と出会う」を企画した。倉橋の珠玉の言葉や一節を手がかりに、身近な保育実践をふりかえり、現代の保育観を問い直す機会にしたい。倉橋と同時代に生きた研究者、保育者へのインタビューも紹介する。

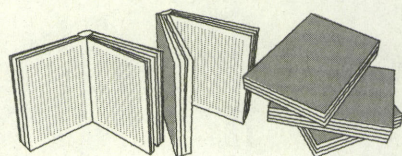
こころもち

子どもは心もちに生きている。その心もちを汲んでくれる人、その心もちに触れてくれる人だけが、子どもにとって、有り難い人、うれしい人である。

子どもの心もちは、極めてかすかに、極めて短い。濃い心もち、久しい心もちは、誰でも見落とさない。かすかにして短き心もちを見落とさない人だけが、子どもと俱にいる人である。

心もちは心もちである。その原因、理由とは別のことである。ましてや、その結果とは切り離されることである。多くの人が、原因や理由をたずねて、子どもの今の心もちを共感してくれない。結果がどうなるかを問うて、今の、此の、心もちを諒察してくれない。殊に先生という人がそうだ。

その子の今の心もちにのみ、今のその子がある。



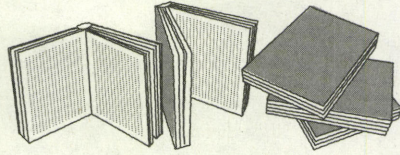
「いろいろもち」に近づぐために

浜口順子

特集「いま、倉橋と出会う」の第一回目は、倉橋の保育理論の中でもひととき美しい彩りを放つ和語「心もち」を取り上げる。右の「「こころもち」と題する文章は、昭和十一年に出版された『育ての心』の前半、「子どもたちの中にいて」という章に収められている。『育ての心』には合わせて五十篇、詩のような、それぞれ十行程度の短文が続く。私は、よくその辺りのページをぱっとあてずっぽうで開いてみて、読んでみる。新鮮な風に吹かれたような気分になる。

全体性

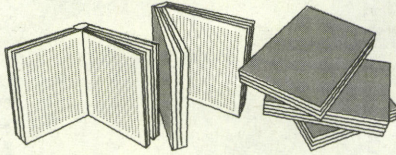
最初にこの文章が発表されたのは、昭和七年の『幼児の教育』（第三十二巻）五月号の巻頭言だった。その前年に出版された、倉橋の代表的な学術的著書『就学前の教



育』において、「就学前の教育法の特性」として掲げられた八つの項目のうち、最後のものが「心もち」である。「生活本位」、「遊戯の尊重」、「社会的」、「環境的」、「機会の捕捉」、「欲求の充足」、「生活による誘発」という七つの漢語的項目の後に、「心もち」が最後にくる。来てしまふ。この違和感は何か。これは、ただ言葉の雰囲気のみで、漢語的・学術的な七項目で、幼児期の生活的な教育のあり方全体はほぼ分析できているのだが、それだけでは言い足りない何かなのである。「全体としては心もちが潤っており、心もちが滲んでいなければならぬ」と倉橋は説く^註。

「心もちは味である。就学前教育はその意味において味の教育である。心もちは感じである」心もちは、認識の対象ではなく、感ずるものなのだ。だが、いま、子どもが「悲しんでいるな」「楽しそうだな」などと感じるだけでもなさそうである。情緒を喜怒哀楽に分けて、そのどれかの言葉で済ませてしまつては、まだ認識に近いのではないか。味も、甘いか辛い酸っぱいか、いずれかの言葉を選んだだけでは、感じたものを言い表したことになる^注。

本田和子は、倉橋の嗅覚という感覚にも着目する^註。倉橋は、本当の子どもの匂いがしない幼稚園を「臭い」と言つては警鐘を鳴らすのである。子どもの生活者としての匂いは遠ざけたい臭気ではないが、「幼稚園」が生活から離れ固定化した方法に流れる時、それは臭くなる。物理的な嗅覚ではない、深く見通す感覚である。この種の感覚をもつてして「心もち」にも近づけるのであろう。



「気持ち」と「心もち」

「心もち」という言葉は「気持ち」と似ているが、語感は相当異なる。倉橋の時代もそうだったのだろうか。ほんの一例だが、ちょうど「こころもち」が書かれたのと同年の、これら二つの言葉が混在する文章を見つけた。倉橋は、人形芝居を幼稚園に広めたいという思いを述懐し、「その時の私の心持ちの中には、型にはまった幼稚園を、真に子どもの世界らしい幼稚園にしたいという主張が、根本になってはたらいいたに相違ない。が、それよりも、もっと純な気持ち^{注3}は、幼児達を喜ばせてやりたいということであった」倉橋の人形芝居普及にかける思いの「根本」に迫る奥行きが心もちにはある。それに比べ表層的ではあるが、その場の人を突き動かす「純な」気持ちとの、二層性が見えないだろうか。

(お茶の水女子大学准教授)

注

- 1 『就学前の教育』一九三一年より。『倉橋惣三選集三』倉橋惣三著 フレーベル館 一九六五年 p. 496～497に所収
- 2 本田和子『倉橋惣三』をめぐるとの見解』より。倉橋惣三文庫10『倉橋惣三と現代保育』津守真・森上史朗編 フレーベル館 二〇〇八年 p. 173～177に所収
- 3 菊地ふじの・徳久孝子著『幼児のための人形芝居の脚本』保育叢書1 フレーベル館 一九三二年 倉橋による序文より

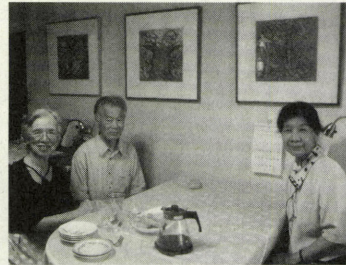
インタビュー

「いろいろもち」

その人の、その時

津守真・房江夫妻に聞く（その1）

聞き手 江波諄子



●田舎のいま

江波（以下E） 津守先生は、今までもいろいろなところで倉橋惣三について語ってきてくださっています^洋が、それらを通してまた、新たに倉橋に出会えることがあり、学べるものではないかと思えます。また、今回お話をうかがう私のいまの心境は、子どもがお母さんに、素敵なお話をもっと聞かせて、もう一度聞かせて、とおねだりするようなことかなと思います。先生はこのインタビューの

話をもちかけられてどのように思われましたか。

津守真（以下M） 倉橋先生のことを、こうして改めて皆さんにお話しできるのは、本当に幸いなことだと、この間からずっとそう思っていました。私は青年期から日記をつけていて、倉橋先生に初めて会いに行った昭和二十四年五月九日やその前後のことも記しています。そのころの日記をこうして手元に置いてお話ししようと思います。

E 倉橋が生まれたのが明治十五年、その四十四年後に津守先生がお生まれになっています。津守先生

は、大学一年生の時に岡部弥太郎^{註2}から倉橋先生の名前を聞き、それから、女高師(現お茶の水女子大学、以下お茶大)出身の愛育会の保育者の方から『幼稚園雑草^{註3}』を見せてもらい、そして昭和二十五年からお茶大で教え始められた。そして、それと前後して平井信義先生^{註4}に連れられて、倉橋先生に会われたのですね。

M そうです。そのあたりのことを、たびたび日記に書いています。毎週のように中野のご自宅を訪ねてはお話をうかがいました。倉橋先生をそうして訪ねて、僕はなんとというか「ああ」と感激したんです。書くことはもつとたくさんあったことをいまでもよく覚えているけれど、その時の様子や交わした会話ではなく、ただ印象に残っていることだけを日記に書いてあるんです。

E 倉橋先生に出会って津守先生が感じられた峻厳さ・主体性ということが、その後の先生の保育研究者としての歩みを示唆されているのではないかと感

じます。いまはそこからもう何十年も経っています。が、もうこの時にご自分の中には、そのような歩みをするという決意のようなものはおありだったのでしようか。

M そう思います。この後、数知れないいろいろな理論や学説が出てきたのだけれど、結局最後まで僕の中で残っているのは倉橋先生との出会いのところに日記に記したことです。

●長い年月を模索する

E 今日せひうかがいたかったのは、『倉橋惣三「保育法」講義録』中の「今なぜ倉橋^{註5}か」で、先生が書かれていることについてです。倉橋先生にお会いした後のことだと思のですが、「私はかつて倉橋惣三は保育の実践をしたことがないからその観点からは彼の論には不十分な点があるのではないかと思っていました。……私はそのことを自覚するのに、長い年月を模索することになった」という文章

を見て私は、「長い年月を模索する」というこの言葉に、立ち止まってしまいました。大学でいろいろ勉強し、これから自分の道を決めていかれる時に、大学でさまざまな知識を学ぶにとどまらないようなご自分の道を、とでもいいねいに時間をかけながら見つけ出していかれたということだと思つのですが。

M 僕は、模索の時期が本当に長かつたんですね。

三十年かかつて、まだわからない。それから保育そのものがわからない。このごろになって初めて、前より少しわかつてきたのは、この類のことなんですよね。子どもとつきあう時の「こころもち」というのが、自分でも身についてきたような気がするんです。それはほんとうに、一瞬のことでもあり、長い期間の幅をもつたものでもあり。

E 何か道を探していく時、ぱつと見つかることと、むしろわざと遠回りするというのか、長い道程をかけて探し出したこととあるのではないかと思うのですね。同じことでも、すぐにわかつた、というあ

り方もあると思うんです。でも、あえて津守先生が長い時間とエネルギーをかけられたということに、私は、ああ、それでいいのかと納得するんですね。わからない中で、わかるうとして向かつていく。

M そして、わからない。わからないことが保育。

●「こころもち」と保育学の現代的課題

E 科学的とか客観的とかいう話にかかわると思うのですが、後の世代の私たちもやはり、そこに長い時間をかけて悩んで道を進んでいくのだと思うのです。今の保育や保育研究の現実を見て、大学で学ぶということ、あるいは学問の知識をどのように考えていったらよいと思われませんか。

M いまはそういうことが大きな転換をする時代に立ち至っているのではないかと思います。保育学という、人びとはつまらない小さいことと思うかもしれないけれど、でも今、保育のことは時代の仕事でしょう。学問としてどうかは置いておいて。そうい

うことを考えると、保育を取り巻く学問というのは、これまでには想像できなかったような、そういう大きな学問の可能性をはらんでいるのではないかと考えています。勝手なひとりよがりの考えかも知れないけれど、そういう点でも、哲学とか何々学よりも、保育学は大道となつて歩き始める。長い目で見れば、今まさに、そこに立ち至つてゐる。倉橋先生の目指していたことも、そうだったのでしよう。

E 子どもを真ん中において、360度保育の学問がある。その中心を子どもというところに置かなければ保育とか子ども学というのは、あり得ないということでしょうか。

M 今回のテーマの「こころもち」は、そこに位置するのではないかと思いますね。倉橋先生がおっしゃった「こころもち」というのは、科学におさえることができるものではないでしょう。「こころもち」は「こころもち」であつて、子どもの「こころもち」に触れることなくして、子どもの保育も保

育学もないのではないかなあと思っています。

E 「こころもち」と表現されることは、きわめて現実そのままというか、「科学的」ではすくいきれないものがあるすごくあつて、ともかく言葉でも説明しきれない。

M それに近いですね。＼その人の、その時＼。

E 「こころもち」というのは、その場面に子どもがいて、保育者がいて、子ども同士でもいいのですけれど、その場面のできごとの周辺に漂うものや、漂うものを感じることが、地盤になつてゐるのかなと思うのですが。

M 文字にしてしまうと、もうわからないですね。

●子どもたちの中にいて

— 八十三歳、いまこの時のこころもち

津守房江（以下F） 名保育者が必要なのではなくて、よい保育者が必要なんだなあと、この間ちらつと思つたんですね。

M そう、保育の名人が必要なのではなくてね。

F 名人ではなくて、その人がいると何だか知らないけれどよかった、と思う。愛育養護学校（以下愛育）の若い保育者が、津守先生が来てくれるとみんなが明るくなる、というのか、安心感ができると、そんなことを言ってくれました。それはつまり、いつでも来ていただいて構いませんよ、という意味なのですけれどね。

E だから、そこで津守先生が何かなさったことが素晴らしいことだったとか、そういうことではないですよ。そこにいらっしやる、その周辺の空気のことですよ。そこからみんなが感じ取るような。

F 醸し出す空気かな。

E 津守先生が「そこにいた」ということは、そこにすべてがあるということ、ですから見えない人にはわかりませんよね。そこに居合わせれば、言葉にできないほどのたくさんのもがそこにあって、それを感じ取っていくということでしょうか。

M ほんとうに、＼その人のその時＼なんです。ね。

先ほどの日記、昭和二十四年九月五日。「今はほんとうに充実した気持ちで子どものこの世界の世界に入っけていけそうに思う。ほんとうの人生の暗闇を見ないで、ほんとうにこの世界に遊んだら、どんなによいことだろう。こころの世界に遊び、その世界を考えていく。私はこころの世界の遍歴を始めよう。」これは私がちょうど九月十九日に倉橋先生の所に行った前後に書いたものです。いま、愛育で自分の見ている子どもたちと接する時には、ちょうどこのような感じだと思えます。

E すごくうれしいのは、先生がとめていねいにいねいに道を歩かれていらっしやる。それがとても大きな私の支えになっています。生きるのが楽になりますね。前を歩いているのが、みんなわかった、はつきりとかうなんだ、という人ばかりではないですよ。

F 津守は現場から帰ってくると、「僕は愛育に

行っても何にも役に立たない」とよく言ったんです。現在でもそう言うんです。だけど私は、役に立っているんだらうと思うんですよ。存在自体がね。みんなかびかの元気な人ばかり、いくら走っても疲れない人ばかりではなく、こうやってみんなに話しながら、こつと寝てしまうような人がいるのが、自然なことだと思っんです。それが八十三歳の、いまの「こころもち」なのではないかしら。愛育の子どもたちにとつても、こういうおじいさんが学校にいるということが、とてもいいんじゃないかと思えますよね。いつもかびかな、よくできる人ばかりがしのぎを削って保育の世界でもやっているのではなくて、なんととはなしにみんな少し体がゆるんでいる、それもいいんじゃないでしょうか。ゆるめられる、ということがね。

E いろいろな時間が流れている人がそこにいる。

F そうそう、そういう意味で。

M 最近僕は、現場に出ていて気持ちがいいんで

す。おもしろくなった。若いころもおもしろかったですよ。おもしろかったけれども、こういう自然のおもしろさとはちよつと違ったかもしれないね。その点でも僕は、進歩したと思っんです。いまになって、年をとればそれだけ衰えるというわけではなくて、こういう部分は進歩するんじゃないかと、そんな感想をもっています。

津守真・津守房江(保育研究者) 江波諄子(常磐大学)

記録：山下紗織(お茶大大学院生)

構成：菊地知子(お茶大幼保プロジェクト)

注

- 1 最近のものとして、『対談「今、倉橋を語る」』の準備の中で『幼児の教育第一〇六巻第九号 二〇〇七年、『特集 日本保育学会第六十回大会 対談 今、倉橋を語る』 保育の実践と研究12・2 スペース新社保育研究室 二〇〇七年を参照
- 2 母子愛育会の初代教養部長
- 3 倉橋惣三文庫5、6 フレーベル館 二〇〇八年(初版一九二六年)
- 4 昭和二十四年当時お茶大児童学科教員、母子愛育会研究員、愛育病院小児科医
- 5 菊池ふじの監修、土屋とく編 フレーベル館 一九九〇年 p.24

「いじろもち」にふれて応える

嶺村法子

日々の生活の中で

保育者として、子どもの心もちにふれられた時は
どううれしいことはない。

門に立つ私に、毎朝のようにいま摘んできたば
りの小さな花を差し出してくれる子どもがいる。も
う片方の手には、必ず担任のために同じ花を持って
いる。一輪ではなく、必ず二輪……。

クラスの中でもひとときわ小柄で幼く見えるこの子

の心もち……。朝の出会いに、花と一緒にそっと受
け取る。

保育者として、子どもの心もちに応えられなかつ
た時ほど、切ないことはない。

保護者会のために大勢の保護者が集まったホール
の壇上で、大声を上げて走り回る子どもがいる。
「もうすぐお話が始まるから、早くお部屋に戻って
ね」声をかける私の手を振りほどいて逃げるこの子

の心もち。いつも朝から遊べるホールが今日は使えないことを、この子はどのように感じているのか、どうして、いま、ここで、こんなにも走らないでいられないのか……。

保護者会を時間通りに始めようとしている私は、いまのこの子の心もちを思いやり、ふれて応えることを忘れていない。こうして振り返ってみれば、大したことではなかったはずである。少し遅れたからといってとがめたてる人がいるわけでもない。

あの時、あの子の心もちにもっと寄り添おうとしていれば……。保育者としての一日は反省に満ちて終わる。

しかしまた、保育者としての一日は、喜びにも満ちている。

保育室で、園庭で、廊下で、私の姿を見ると「きょうとうせんせい！」と呼びかけてくる子がい

る。「はあい」と応えると、すぐにまた「きょうとうせんせい！」と返ってくる。うれしくて、何度でも「はあい」と応える。

こんなふうに、相談事や用事のためではなく、ただ呼びかけるためだけに呼ばれることが、どんなにうれしいことか、そしてまた、なんと久しぶりのことかと思う。

まっすぐに私をとらえるまなざしに込められた、いまのこの子の心もち……。私もいまこの瞬間、そ



の心もちに応えることだけに一生懸命になる。

子どもから思いもかけず親しみのこもったまなざしを向けられて、その心もちに気づかされることもある。

けがをして、「念のためにお医者さんに診ていただいた方が……」と言う私に、「痛くない。絶対に行かない」と泣いて訴え続ける子。大事をとって保護者に連絡を試みたが、母親が迎えに来て、言葉を尽くして説得してもガンとして「行かない」と泣いて訴える。

その必死な表情に、いまのこの子の心もちとけがの具合をはかりにかけ、母親の了解を得たうえで、降園まで預かることにする。「わかった。それじゃあ、お母さんには帰っていただいて、幼稚園でお弁当を食べましょう」と。

降園後には、母親の話聞き分け、行きつけのお医者さんで消毒してもらったとのこと。翌朝、

「痛くなかったよ」と誇らしげに報告に来る。

翌日も、その翌日も、私が通りかかると、その子は遊びの手を休め、「あ、きょうとうせんせい！」と手を振ってくる。ちよつとはにかみながら、困難な時を共に闘った同志のようなまなざしで。

「あの日から、何か親しみを感じてくれているみたいで……」と話す私に、「本当に」と、母親も笑顔になる。

済んでしまえば、何ということのない出来事である。だが、あの時のあの子の心もちに大人が精いっぱい応えたからいまいがある。

保育者は、常に、いま、この時でなくてはならないことと、後でもよいことの判断を迫られる。いま、どうしてもすべきこと、いま、この子のためにと願うことは何なのか。

計画通り全体の活動を進めることなのか、少し遅

れても、いまのこの子の心もちにいいに伝えることなのか。

子どもの意思や欲求を受け入れることなのか、あるいは状況を伝え、自ら一歩踏み出せるように背中を押すことなのか。

その一瞬の判断に、保育者の心もちがあらわれる。

「心もち」と幼児理解

こうして子どもたちとの一コマ一コマを思い出す時、『育ての心』のフレーズが心の中に去来する。暑苦しい顔をしてはいなかったか、とげを含んだまなざしを向けていなかったか、いきいきしさを失ってはいなかったか、よろこびの人でいられたか……と。とりわけ、子どもの「心」でもなく、「気持ち」でもなく、「心もち」と言われる時、「ああ、心もち……そう、心もちなんだ……」とストンと落ちるものがある。

「子どもは心もちに生きている。その心もちを汲んでくれる人、その心もちに触れてくれる人だけが、子どもにとって、有り難い人、うれしい人である。」

『育ての心(上)』P 34

「心もち」という響きには、この瞬間にそっとふれて感じて、私自身の「心もち」で精いっぱい応えたいと思わせる何かがある。「いまのこの子の心もち……」そうつぶやいてみるだけで、保育者としていま、大切にすべきことが見えてくるように思う。

幼児理解が大切であると言われもし、言いもする。私がこの子をどのように理解したかによって、言葉のかけ方が違ってくる。理解のしかたによって、援助の方向が変わるのである。だからこそ、幼児理解が大切であると。

そのとおりであると、私も思う。子どもを理解す

る目を養い、今、その子にとって必要な援助をできるようになることが、保育者としての専門性を高めることである。

だが、「心もち」にふれて応えることを抜きに、保育者としての専門性を語ることはできない。子どもの行動を観察し、育ちや課題をとらえ、必要な援助を探ることができたとしても、子どもの心もちにふれ、ていねいに応える中でしか、その子の育ちにつながる援助はできないからである。

このことを、現場を共にする保育者同士でさえ共有し合うことが難しくなっている現実がある。だからこそ、「いまのこの子の心もちは……」と声を出して語り合うことから始めたいと思う。

明日の保育に向けて

いま、保育界では、あまりにも目に見える成果を求められ過ぎてはいないだろうか。

子育て中の保護者を支援すること、保幼小の連携を図り、滑らかな接続に努めること、遊びの中に学びの芽を見出し、思考力や表現力を育てること……。

どれも大切なことに違いない。そうではあるが、どれも日々この子の心もちにふれて応えることの積み重ねの上にこそである。成果を求められ、評価を気にして形を整える保育の中では、子どもの心もちにふれて応えることを忘れがちになる。

そのことを自戒しつつ、日々の取り組みや子どもの育ちについて、現場からの発信に努めたいと思う。

「少なくとも、子どもにとって、心もちの判ってくれない先生の傍に居るほどあじきないことはあるまい。いわんや、心理の理解と、心もちの感触とを混同して、さかしくも、児童の心が判っているというような顔をしている人の傍に於いてをや。」

私たちが目指すのは、子どもを真真中に置いて、この子の心もちをくみながら語り合う保育である。家庭や地域、園や学校が、それぞれの立場から、よつてたかつて、いまこの子に必要なことは何かと考へ、実践することである。

そのためにも、現場の保育者には、いまのこの子の心もちにふれて応えることが、どのような変容や成長につながるのかを語る言葉をもつことが求められる。子どもの変容・成長はもちろん、保護者・保育者としての変容・成長について語る言葉が、子どもにかかわる人を勇気づけ、励ます力をもちうるか。そこに、我が国の伝統でもある、子どもの心もちを大切にする保育の存続がかかっている。

そして、何より大切なことは、先輩から伝えられ、受け継いできた精神を、保育をするという行為によつて、後進の保育者に身をもつて伝えていくということである。言葉以前の、醸し出される雰囲気

でしか伝わらないことがある、ということを自覚して保育する時にきている。

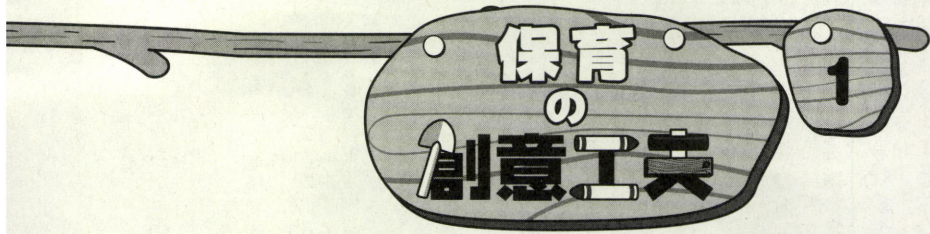
新しい年を迎えるにあたって

こうして子どもと保育者の心もちについて考える機会を頂き、いまの私の立場についても思いを巡らせる。教頭という立場で、現場を共にする多様な職種の人々の心もちにふれて応える園運営ができていだろうか。ベテランゆえの悩み、新任ゆえの心細さ、介助員としての悩みや葛藤、事務や用務を担当しながら子どもにかかわる人の思い……。

いまの私に与えられた職責もまた、これらの人々の心もちにふれて応えることを抜きには語れない。そのことにどれだけ自覚的であっただろうか。

子どもに対するのと同様の心配りと寛容さをもつて、日々の園運営に携わることのできる保育者を目指したい。

(世田谷区立松丘幼稚園)

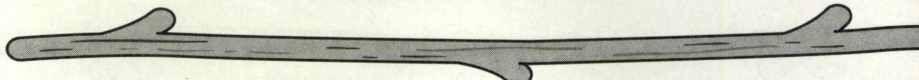


大人の枠組みの解体

前原 寛

私が保育園で仕事をするようになって、二十五年になります。現在は理事長職にありますが、以前は園長という立場で保育園の保育にかかわっていました。その初期のころですからずいぶん以前のことになりますが、保育について「何かおかしい」と考えていました。年号がまだ昭和のころです。

毎日の保育は、朝の「おはよう」の集まりに始まり、夕方の「さようなら」の集まりで終わっていました。集まりの前も後も子どもたちは園にいて、保育者がかかわっているのですが、当時はそれを保育とはあまり意識していませんでした。また、一定の時間になると、子どもたちを部屋に集めてその日の活動を設定していました。

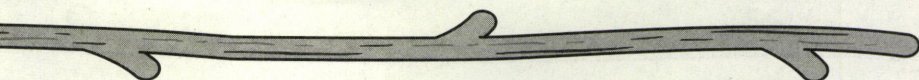


「こんなにも子どもの活動を限定していいものだろうか」そんな疑問が、少しずつ強くなってきました。

私は、そのころ自分の興味で勉強していたJ・ピアジェの理論から保育を考えようとしていました。ピアジェは認識の生成を主テーマにしていますが、そこではどこまでも子どもの興味・関心を中心に据えていました。子どもにとって大事なのは遊びであり、そのためには子どもの興味・関心から活動が始まることとが重要である、ピアジェ理論からはそのような考え方が導かれます。では、そのような保育を実践するために何が必要か、と考えていきました。

「なぜ、子どもの活動を設定してしまうのだろうか。それは、保育者という大人が自分の枠組みを子どもに押しつけているからではないか。子ども自身の枠組みの中に活動が生まれてこなければいけないのではないか。しかし、大人の枠組みを残したままでは、子どもの枠組みは現れてこないだろう。そのためには、大人の枠組みが解体される必要がある。大人の枠組みを解体することによって、子どもの枠組みが現れ出てくる、そこに子ども自身の活動である遊びが生まれてくることになる。」

このような思考プロセスは後から整理したのですが、当時は直観的に、大人の枠組みの解体が必要だと考えました。そこで「解体保育」と名づけた取り組みを始めました。

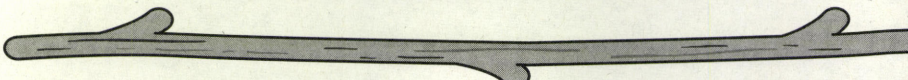


「解体保育」が、保育用語辞典などに記載されているような専門用語であることは、後日知ったことです。

最初に解体した枠組みは、時間と空間でした。大人がつくった時間割という枠組み、クラスという空間の枠組みを解体することによって、子どもの中から生まれる活動を主体とする実践に変化させようとなりました。これも後で知った用語をつかえば、保育者主導型から子ども主体型の実践への転換ということだと思います。それには何年もの日時を必要としました。頭ではわかっていますが、実践が変化することは単純にはいきません。園生活全体にわたって見直すことが必要だからです。

二〇〇九（平成二十一）年四月より保育所保育指針が改定施行されました。今回の改定には幾つかの特徴がありますが、その一つに「創意工夫」の強調があります。保育指針原文で四か所、解説書も含めると二十一か所も言及されています。「創意工夫」という日常語が保育所保育のキーワードとして使用されている、このことをどう受け止めるかが、現在の保育現場の課題の一つになっています。

気になるのは、「創意工夫」を、何らかのアクセントをつけてほかと違った実践をしていることをアピールするという意味で理解する傾向があることではないかと感じます。



す。いわゆる目玉保育、ブランド保育のように、対外的な「受け」をねらった保育をすることを「創意工夫」と呼んでいる現場がすでに出てきています。

しかし、「創意工夫」とはそんな表面的な意味ではありません。保育の本質にかかわる何かを意味しているはずで、単に目新しい何かをすることではなく、子どもにとってよりよい生活の場としての保育を目指すための取り組みこそが「創意工夫」と呼ばれるものです。

先述したように、大人の枠組みを押しつけるのではなく、子どもが主体となる保育の取り組みへの転換を図ったのも、当時はそのような言い方はしませんでした。創意工夫の現れと言えます。その取り組みは、現在でも継続しています。不断に実践を問い直す営みの中に創意工夫がある、そんな思いをこの連載では取り上げていきたいと思っています。

さて、実践を問い直す視点の一つに、時間の枠組みがあります。大人の設定した時間割で保育するのではなく、子ども自身から生活の流れが新たに形成されるような取り組みを目指そうとしました。そこに浮かび上がってきたのが、「昼寝」でした。「昼寝」は子どもの生活の中でどのような意味をもっているのだろうか、そんな問いが見えてきたのです。今回は、昼寝をテーマに考えていきます。

(鹿児島国際大学准教授・元安良保育園園長)

第4回

ツブキ先生の虫のつづき

冬に虫はいるのだろうか？

津吹 卓



虫にとつて冬とは？

いまは冬のまったただ中。冬の虫というと、何を思い浮かべますか？ え、冬にも虫はいるの？ そう、その感覚は正しいのです。冬は虫にはとても過ごしにくい季節です。

では第1問です。なぜ冬は虫にとつて過ごしにくいのでしょうか。すぐにわかりますね。答えは、寒いからです。でもそれだけででしょうか。実はほかに理由があるのです。寒いので植物も冬越しの状態

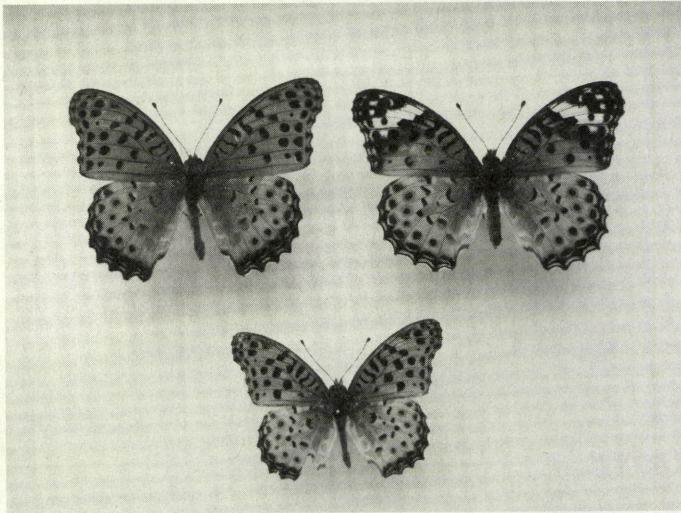
です。だから若葉や新芽、そして花がありません。もう一つの答えは、多くの虫にとつての餌がないためです。でも冬は、秋と春をつなぐ大事な季節です。もし冬に全滅したら、春に虫は出ません。冬にも虫はいますが冬眠しているものが多く、目立たないのです。それでは第2問です。虫は、一般にどんな姿で冬越しをしているのでしょうか。寒くて餌もないので、動かずに眠り餌を食べないことがベストです。答えは、卵かサナギです。だから、虫が目につかないのです。たとえば、カマキリは卵、モンシロ

チヨウやアゲハチヨウはサナギですね。

では、すべての虫がそうなのでしょう。何事にも例外があります。幼虫や成虫で冬越しする虫がいます。たとえば、一部のチヨウです。小春日和にチヨウが飛ぶ姿が見られることがあります。このチヨウは成虫で越冬しており、暖かいので出てきてしまったのです。テントウムシも成虫で越冬します。

ツマグロヒョウモンとは

ここからは、幼虫で越冬することの多い変わったチヨウの話をしていきましょう。名前はツマグロヒョウモン（爪黒豹紋）といます。羽の「つま」先が「黒い」豹柄のチヨウという意味です。豹柄のチヨウは何種類もいるので、このチヨウは雌の特徴で名前が付けられました（写真1）。ツマグロヒョウモンは南方系のチヨウで、東南アジアやオーストラリアにも広く分布しています。日本では二〇年前までは東海地方までしかいなかったのが、現在は中部・関東



▲写真1：ツマグロヒョウモン（上段の左：雄、右：雌、下段：春の小型の雄）

地方でも見られるようになりました。東京でも、秋にはモンシロチョウよりも多い時があります。現在日本各地で北上がおきていますが、北に進むほど厳しい寒さの中で越冬をしなくてはいけません。

ツマゲロヒョウモンにとつての冬

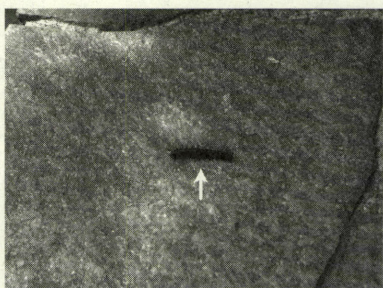
このチョウは南方系のため、もともと越冬は不要でした。どんどん成長するので、越冬の姿が決まっていないのです。主に幼虫で越冬をします。幼虫も、卵からかえった小さな幼虫（一齢）から、五回皮を脱ぎサナギになる直前の大きな幼虫（六齢）のうち、中程度のものが多いです。

それでは第3問です。この幼虫が越冬するために必要なことは何ですか。先ほど一般的な話をしました。答えは、まず寒さを避けること、そして餌を確保することです。冬は気温が下がると凍え死ぬこともあります。また寒いと動けないために餌を食べられず、餓死することもおきます。

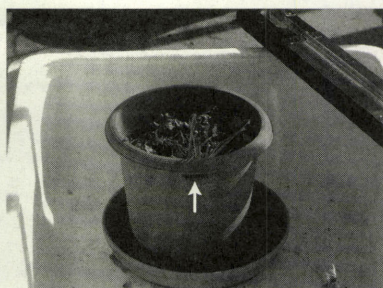
では、寒さを避けるためにはどうしたらよいでしょうか（自然の中で、ヒトの場合はどうしますか）。幼虫も、歩いて寒いところを避けたり、風のない場所へ移動したりします。幼虫はスミレの葉を食べますが、スミレの株の中へ潜り込んだり、落ち葉の下に潜ったり、極端な場合は暖房の室外機の近くに來たりすることが報告されています。実際に冬に朝から夜まで一匹の幼虫を観察したところ、移動して居場所をよく変えているのがわかりました。

朝は寒いので、動けるようになると日光浴をし、正午には直射日光の下の気温が25℃にもなるため、幼虫は枯れ葉の下など日陰に移動しました。風が強いと、植木鉢の溝に身を隠し、風をよけていました（写真2）。たかがチョウの幼虫ですが、生きるためにいろいろ工夫しており、僕も驚きました。

では第4問です。餌のスミレの葉を食べ尽くしたらどうするでしょうか。同じ発想で考えてください。餌がないと生きていきません。答えは、スミレの別



▲写真3：餌から離れ移動中の幼虫



▲写真2：植木鉢の溝に隠れた幼虫

の株を探して放浪するです。晴れた冬の日の午後一時ごろ、餌を食べ尽くした幼虫が65cm程移動したのを確認しました。歩く速さを数の多い夏の幼虫で調べたところ、ベランダでは5秒間で12cmでした。すると1分間で約1.5m歩くことになります。ただベランダは表面が滑らかなので、地面だとスピードは落ちるでしょうが、移動する能力は非常に高いの

です。冬でも気温が高い日中なら、数mなんて軽く歩いてしまうのです（写真3）。

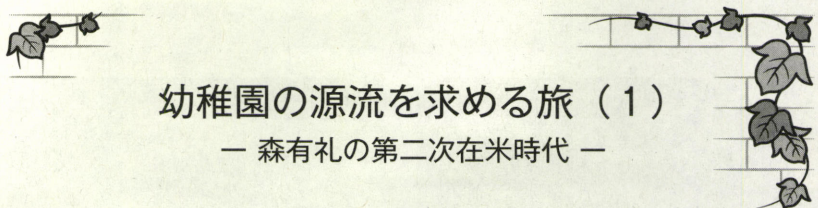
では、餌を探す幼虫はみんな餌を探し当てるのでしょうか。もし餌を探せなかったらどうなるのでしょうか。世の中そんなに甘くありません。多分、かなり多くの幼虫が餌を見つけれずに餓死するのだと思います。その証拠に、東京での春のツマグロヒヨウモンは非常に少ないのです。そして春のチョウは小型です（P.29写真1下）。冬のスマシレは葉も小さいので、きつと餌不足で栄養失調なのでしょう。それでも交尾をし、卵を生み、チョウも苦労しながら命を次の世代へつなげているのです。

4回の連載の、虫が何をしたい？ という「謎」も「虫の気持ち」で考えるとわかるような気がします。僕はこんな見方で「謎解き」を楽しんでいます。

（十文字中学・高等学校（理科／生物）

十文字学園女子大学児童幼児教育学科非常勤講師）

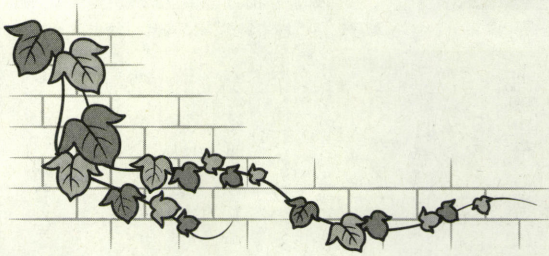
*この連載は今回で終了いたします。



幼稚園の源流を求める旅（1）

— 森有礼の第二次在米時代 —

エリザベス・ピーボディー のボストン



国吉 栄

二〇〇五（平成17）年に関信三研究注に一区切りがついた私は、二〇〇六年と二〇〇八年、アメリカの幾つかの都市を訪ねた。日本に幼稚園が導入されるに至る過程は、決して単線で考えうるものではないが、私はその最も重要な動機は、幕末・明治初年の諸外国、特にアメリカにおける日本人たちの諸経験にあったと考えている。幕末・維新というわが国にとって特別な時代に、彼らは何を経験し、それがどのように幼稚園創設へとつながっていったのか。長く温めてきたこの課題に取りかかるに際し、具体的な一步を、直接の舞台アメリカから始めたいと思ったのである。

当時、アメリカにいた日本人たちの中でも特に重要なのは、わが国最初の駐米外交官としてワシントンに在留していた森有礼の存在である。森有礼は、言うまでもなく近代学校制度の基礎を形作ったわが国の初代文部大臣であるが、彼と幼稚園との関係については、森研究においても、幼児教育史研究においても、ほとんど言及されてこなかった。

本連載では、二回のアメリカ旅行記を軸に、これまで描かれたことのない、アメリカで芽生えたわが国の幼稚園前史時代をラフスケッチすることとしたい。

Pinckney Street 十五番地

二〇〇六年、アメリカへの旅程を組むに際し、私は迷わず最初の滞在地にボストンを選んだ。ボストンはアメリカで最初の英語による幼稚園が開かれた場所である。また、その創設者エリザベス・ピーボディの九十年にも及ぶ生涯のさまざまな足跡が残されている場所でもある。彼女の幼稚園があったのはPinckney Street 十五番地。私は学生時代からこの番地だけは覚えていて、いつか行ってみたいと思っていた。

九月中旬のさわやかな日、私は思うようにはかどらない図書館仕事を切り上げて、Pinckney Street があるビーコン・ヒルに向かった。ボストン中心部には入植ピューリタンの共有地であった広い緑地、ボストン・コモンが広がっている。アメリカ最初の市民公園であ

るといふ。その北側に面しているのがビーコン・ヒルと呼ばれる丘陵で、開拓当初から開け始めた由緒ある住宅地である。丘陵の右手には、マサチューセッツ州議事堂が金色の丸屋根の塔をかかげてそびえ立ち、その正面には、向かって右に辞書を編纂したダニエル・ウエブスター、左にマサチューセッツ州の教育制度を作り上げたホーレス・マンの銅像がこちらを見下ろしている。

明治五年にボストンを訪れた岩倉使節団一行もここを散策したようで、久米邦武編『特命全權大使米欧回覧実記』には、「波士敦^{ボストン}『ビーコン』街」と題する銅版画が収められている。当時馬車が走っていた車道には自動車や観光客用のバスが行き来しているものの、あたりの景色に変わりはないようである。

ビーコン・ヒルに一步足を踏み入れると、レンガや石が敷かれた狭い歩道の両側に、石造りの重厚な建物が静かに並んでいた。ピーボディにとってボストンはあこがれの街であった。十代のころ、ビーコン・ヒ

ルの邸宅で家庭教師をしていたこともある。彼女が住み込んでいたのはどの家だったのかと、通りの邸宅をついのぞきこんでしまう。

ポストン・コモンを背に、当時に思いをはせながら Pinckney Street を探して坂を上っていくと、坂を上りきった辺りにその標識が見えた。ふと、そこは今まで通ってきた所とは何か違うように感じた。間口の狭いペンキ塗りの木造の家が見えたからかもしれない。

幼稚園があった場所は、今はレンガ造りのアパートになっていた。というより、幾つかの番地を合わせてアパートが建てられ、十五番地はそのアパートの一部になっていた。何度あたりを歩き回っても番地の並び方から見ても、十五番地はさつき目についたあの木造の家と同じくらいの面積だったようである。

驚きであった。もちろん、文献から幼稚園の規模も知っていたし、普通の住宅で始められたであろうことも知っていた。けれども敷地自体もこんなに狭かったのだ。広々とした敷地にゆつたりとした専用園舎が建

設された日本の幼稚園の始まりの姿と比べると、両者の違いは歴然としていた。

Black Heritage Trail

数日後、調べもののために Postonian Society に出かけた。予約していた時間前に着いたので、階下のビクター・センターで本などを見てみると、一枚の観光地図が目にとまった。空港でもらった地図よりずっと見やすそうだ。見ると、地図には赤い線と青い線が引かれており、青い線は Pinckney Street を通ってビーコン・ヒルを巡っていた。いったい何だろうと目をこらしていると、ボランティアと思われる老年の紳士が話しかけてくれたので、この線は何かと尋ねてみた。

赤い線は Freedom Trail と名付けられたアメリカ独立戦争の史跡をたどるラインで、「ほら、道に赤いラインが引いてあるでしょう」と、戸口まで出て説明してくれた。このラインをたどっていけば、迷わず主な史跡を回れる仕組みになっているという。こんなことは

旅行案内の一冊でも読んでくれば、質問するほどのことではなかったのだろう。では、ビーコン・ヒルを巡る青い線は？ それはBlack Heritage Trailであるという。黒人解放の史跡をたどる道である。しかし、こちらは晴れがましいFreedom Trailのように、道路に観光客用の線が引かれていたりはない。

Pinckney Street を走る青い線上の三角印を指して、彼は言った。「これは、ビーコン・ヒルに最初に建った黒人の家だよ」あの木造の家がそうだったのだ。そこからもう少し先に指をずらして彼は言った。「これはPhillips Schoolとってポストンで最初に黒人を統合した学校だよ」そうだったのか。ピーボディーの幼稚園は、黒人解放の史跡の間にあつたのだ。私は二つの史跡の中間を指して言った。「ここにエリザベス・ピーボディーという人が、アメリカ最初の英語の幼稚園を開いたのはご存知ですか？」「いや、知らないな」「そうですか。この学校が統合されたのはいつですか？」「

「一八五五年」「幼稚園が開かれたのは一八六〇年で

す」「南北戦争が始まる前の年だね」「はい」。

ビーコン・ヒルは、十九世紀中葉まではポストン・コモンに面した南斜面が富裕層の邸宅、北斜面は黒人が居住する地区、とはつきり住み分けられており、北斜面はブラック・ビーコン・ヒルと呼ばれていたという。ピーボディーが幼稚園を開いたのは両者を分けていた境界線上であり、ビーコン・ヒルにとって、激動の、流動の時代であつた。

Bostonian Society からの帰り、私はまっすぐにビーコン・ヒルに向かった。ピーボディーの幼稚園とは何だったのだろうか。すぐに答えを出せない問いではあるが、再びPinckney Streetを歩き、Black Heritage Trailを巡って北の斜面を下りながら、彼女がやがて全力を傾注して、幼稚園を全米に設立するために旅立った出発点として、私なりに腑に落ちるものを感じた。

(彰栄保育福祉専門学校・白百合女子大学非常勤講師)

注 国吉栄著「関信三と近代日本の黎明 日本幼稚園史序

説」新読書社 二〇〇五年



わたしのお気に入り

藤井砂緒里

人生の縮図？

体温を測る3分、カップ麺を待ちながらの3分……。そんな時間を楽しみながらつかえるかしら？ などと考えながら3分トボガンを購入しました。

このおもちゃと出あったのは数年前の初冬。おもちゃコンサルタントの仲間にデパート販売員を頼まれた時のことでした。クリスマスに子どもによいおもちゃを贈りたいと願う人たちに交じって、展示商品をくまなく見て回った際、特に気に入って購入したのでした。

3分トボガンは、ビー玉が七つの円皿を順に転がり下りてくるおもちゃです。一番下まで落ちるとストッパーが外れ、出番を待っていた次のビー玉が転がり始めます。そうやって付属の七個の玉がすべて転がり落ちると約3分。それゆえ、ついた名前が「3分トボガン」(「トボガン」はチェコ語でらせん状のコースターを意味します)。

ところが実際に遊んでみると、子どもはビー玉が一つずつ下りてくるのを待てません。一気にたくさんビー玉が途中のお皿で大回りをしたり小回りをしたり止まりそうになつたりと、いろいろな様子で落ちてくるのを見るのが大

3分トボガン

チェコHEDA社

ヨーロピアン・ビーチ材を使用

日本の輸入元は「中欧の木のおもちゃ屋がんぐるう」

www.gangroo-i.com

(写真左：横から見たところ・右：斜め上から見たところ)

〈プロフィール〉

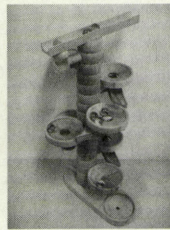
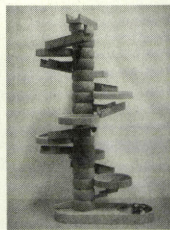
おもちゃコンサルタント（「東京おもちゃ美術館」運営団体「NPO 法人日本グッド・トイ委員会」認定）。児童館に勤務するかたわら、ボランティアでおもちゃを介しての子育て広場などを主催。

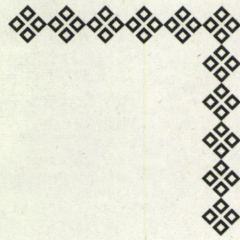
好き。そのうち、付属品以外のビー玉も落とし始めました。

実際に子どもたちと遊んでみて、色柄の違いで各ビー玉の動きが明確になり、それでわかったことがあります。必ずしも、一つ目の穴をいっとう先に通過した玉が早く下に落ちるわけではなく、かなり後から出発した玉が一着で最下段にたどり着くこともあるということです。

子どもたちが何度も何度も遊ぶさまを眺めているうちに、それまで気づかなかった世界が私に見えてきました。転がるビー玉が人の一生と重なって見えてくるのです。学校、就職、結婚、出産——それぞれの円皿は人生のステージ。それらのチェックポイントを各人（ビー玉）なりのあり方で通過していく……。

学校を出て働き始めたまでは順調だったわが人生ですが、その後は困難に出あい、心が折れる経験をしました。3分トボガンのビー玉の動きを見つめ、ストップバーが外れビー玉が入れ替わる時の「カタン」という音を聞いて、「人生で大切なのは生きて死ぬこと、次の世代に命をつなぐこと。自分なりのペースでいけばいい」ふと、そんなふうを感じることで、当時悩んでいた気持ちが少しだけ軽くなったのでした。





一緒につくる

谷田部高子

問いを広げる

もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る
善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、
世界中の子どもに、生涯消えることのない「セン
ス・オブ・ワンダー」神秘さや不思議さに目を見
る感性」を授けてほしいとたのむでしょう。
(中略) 妖精の力にたよらないで、生まれつきそ
なわっている子どもの「センス・オブ・ワンダー」
をいつも新鮮にたもちつつけるためには、わた

したちが住んでいる世界のよろこび、感激、神秘
などを子どもといっしょに再発見し、感動を分か
ち合ってくれる大人が、すくなくともひとり、そ
ばにいます必要があります。

『センス・オブ・ワンダー』^{注1}より
時折思い起こすこの言葉は、保育者として日々子
どもたちと過ごす私に、いろいろな問いを投げかけ
ます。私は子どもの感動と共にいる大人になること
ができているだろうか？ 子どもたちの感性に出あ
い、彼らの感動を分けてもらうのと同時に、自分自

身が喜び、驚き、美しいと心から思うものをためら
いなく大事にすることができているだろうか？ 保
育者としての私の感性を、いま言葉にしてみるなら
どんなことだろう？ 私は子どもたちの姿のどこに
感心し、どこを応援したくて、どんなことを共有し
たいと思っているのだろうか？ ……これらの問い
を手がかりに、ここでは小学部五年生のRさんがい
ろいろな場所でお弁当を食べることについてふりか
えてみたいと思います。どこかで誰かの別な問い
が生まれるきっかけになってくれたらと願いつつ。

Rさんのお弁当

私が勤める愛育養護学校は、幼稚部四人と小学部
十九人、合わせて二十三人の小さな学校です。今年
度は、小学部を三つのクラスに分けて編成していま
す。子どもたちの生活はクラスが基盤となりますが、
空間的にも人間関係においてもクラスを越え学校全

体に広がっています。あらかじめ設定された時間割
はなく、子どもたち一人ひとりが周りの大人や友達
とのかかわりの中で活動や生活を展開させ、自分の
一日をつくっています。^{注2} 昼食の時間と場所も、子ど
もたちと一緒に決めていきます。

私が担任をしているRさんは、実にさまざまな場
所でお弁当を食べます。クラスの友達は食堂（調理
ができるように整えられた部屋）でお弁当を食べる
ことが多いのですが、Rさんはどこで食べるかを毎
日その都度決めていきます。Rさんは幼稚園の子ども
たちなど自分より小さい人たちに気持ちをかけてい
て、話しかけたり、一緒にトランポリンを跳んだり、
公園への散歩に誘ったりし、お弁当もよく一緒に食
べています。また時には、ベッド一つでスペースが
ほほいっぱいの小さい部屋を締め切り一人で食べる
ことも、またRさんがその部屋で食べていることを
わかっていて、自分もそこへお弁当を持ってくる友

達と一緒に食べることもあります。庭のぶらんこで遊んでいるRさんの所へ、お昼の時間よりもずっと早くお弁当を食べる友達が、Rさんのお弁当を持ってきてくれて、庭で一緒に食べることになる日もあります。そのほか、ベランダの隅、階段の踊り場や、出窓の前の小さなスペースなど、あらゆる所がRさんのお弁当の場所になります。

Rさんは大勢人が集まる場所や、自分にとって大きすぎる音や、予想のつかない友達の動きなどが苦手なようです。強い近視であることもあり、Rさんが予測できないものはとても怖いものなのでしょう。その特性も、Rさんが周りの状況によってお弁当の場所を選ぶ理由の一つなのかもしれません。

共同で考える

Rさんのお弁当については、ミーティングでもよく話題に上り、たとえば次のようなことが話し合わ

れてきました。

○ Rさんが「ここがいい」と言っても、大人が場所や時間を提案（床ではなくてテーブル、一人ではなくみんななど）してもいいと思う。Rさんはそれを受け入れるところまで成長していると思う。

○ 床で食べるなら、せめて積み木を運んでテーブルにしたらどうか？ 床でそのままの食事は、文化的なものを伝えそびれているといえないか。

○ いろいろチャレンジしたい気持ちはもっていて、ちよつと怖かったり気が引けたりして一度断わることがあっても、もうひと押ししてもらえば、踏み出せるんじゃないか？

中には私には思いつかなかった発想もあり、戸惑うことや反発の気持ちをもつことも、「そうかもしれない」「よくわからないけれど、やってみてもいいかもしれない」と思えることもありました。自分には足りないところが明らかになって情けないような申

し訳ないような気持ちになり、いつの間にか縮こまっている自分に気づくことも多々あります。考えが自分のものになっていないことをやってしまい、子どもに対して後ろめたい思いをもったり、自分の素直な感情が動かなくなつて子どもとの時間が楽しめなくなったり、それでもとにかくやってみたことで新たな自分の考えが生まれることもあります。

「ちがうー」と出あう

食堂で何人かの子どもたちがお弁当を広げていた時、私は「Rちゃんもここに来て一緒に食べようよ」と誘いに行つたことが何度かあります。Rさんは近くまで来たこともありましたが、部屋のすぐ前の廊下や、部屋と廊下の境目に「ここ！」と言つて座り込むこともありました。食堂の近くまでは来たRさんの様子から、私は「もうひと押し」をしてみました。「えー？ いいじゃない、来て来て」と、可動式

の椅子にRさんに乗せて、遊び紛れに強引に連れてきてしまったこともあります。みんなが座っているテーブルを勧めると、Rさんは「ちがう！」と言つて、自分が「ここ！」と言つた所に引き返したり、あてがわれた椅子から二つ三つ、ずれた椅子に移つて斜めに座つたり、同じ部屋の別のスペースに行つて座り直したりもしました。

大人の個性や、Rさんとその大人との関係性によつて、Rさんが選ぶことも違つてくるのだと思いますが、その時、私との間ではRさんは同じテーブルにはいなくても、独自の位置でみんなと一緒にいる気持ちになっているのだな、と改めて知ることができました。

私が差し出したいもの

前述のRさんの特性を配慮して、Rさんが安心して生活や活動ができるよう、Rさんのお弁当の場所

を初めから大人が用意してあげるやり方もあるのだ

と思います。ですが、好きな歌の歌詞を替えて自分のオリジナル曲につくり替えて楽しみ、友達とのかけっこも自分だけ後ろ向きで走りお腹を抱えて笑っているRさんといると、Rさんが毎回状況の中で自分にちょうどいい所を見つけることに大きな意味があるように思えてきます。Rさんが「ここ！」と言うことで、それまで何でもなかった空間が、お弁当を食べる重要な場になり得ることに私は大きな魅力を感じています。人と共に過ごすさまざまな状況の中で、自分はどうかをしっかりと感じて、その時その時、ちょうどいいものをつくり出すことのおもしろさを共有したいと思っています。「みんなでテーブルを囲む楽しさを、Rさんと共有したいいな」
「Rさんにとって大丈夫なことがもっと増えたらいいな」と思うのと同じくらい、Rさんが自分だけの場所をあらゆる所につくり出すことを一緒に楽しみ

たい気持ちがあります。

私がRさんにいちばん差し出したかったものは、Rさんが選んだその場所を「私はここで食べるのよ」と堂々としていられる場所にするひと工夫だったのだと思います。

ちよつと素敵な敷物やテーブルクロス、時には草花を運んできてみたり、そこで一緒にお弁当を食べたり、Rさんの隣で本を読んだりしてくれそうな友達を呼んできたりすること。友達が来ても、Rさんは少し離れた所に移って背を向けてお弁当を食べ始めたりもします。Rさんに用意した積み木のテーブルでは友達がせつせと絵を描き、Rさんはベランダの隅で時どき空を見ながらお弁当を食べていて、何かおかしいな光景です。そうやって互いに自分を出し合って、子どもたちと一緒にそこに何かちよつと素敵なものをつくっていくことが、私は本当に好きなのだ実感します。

違うものの中で

「テーブルにつこうよ」という提案に出あって、Rさんの「ここ」というきっぱりとした意志が強まったのだと思います。また、子どもたちとの間でも、自分とは違う友達にაცოგれたらうらやんだり、嫌な思いをして悲しかったり悔しかったり、苦手なものから距離をとって過ごしたりする中で、「自分はこのなんだ」とゆっくりとはつきりしていくのでしょう。「自分はこうなんだ」と思う体験が楽しさとして重なっていけば、それはゆったりとした自信となり、違うものをも取り入れて柔軟に自分を育てていくことができるように思います。

保育者は、保育の場や話し合いでほかの人のあり方にふれて、自信を失ってゆらいだり混乱して疲れてしまったりすることもあります。自分とは違う考え方に助けられ、自分の考えを広げられることも、

「やっぱりこれだ」と確かめ強めることもあります。

Rさんが自分の場所で堂々とお弁当を食べるように、私も堂々と自分の感性で動き、自分の考えを言葉にしていきたいと思います。また、別のとらえ方やかわり方をする大人が共にいてくれることにほっとしながら、人の意見や自分の意見にとらわれてしまわない私でありたいと願っています。そうして、その時その時、それぞれの感性をもった人たちと保育の場を一緒につくっていく、その楽しさを重ねていけたらと思うのです。

(愛育養護学校小学部)

注

1 レイチェル・カーソン著 上遠恵子訳 新潮社

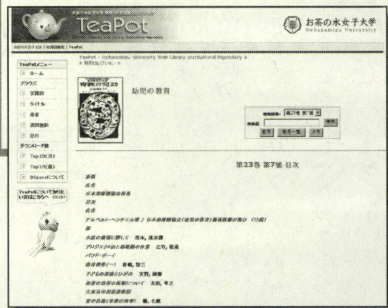
一九九六年 P.23～24頁

2 調理や工作、音楽など、大人から活動を提案する時にも、子どもたちは自分のやり方とペースでそれを取り入れています。お弁当は時間になると誘い合ってクラスルームなどに集まって食べることもあります。

▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (13)

戦時下の『幼児の教育』

米田俊彦



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション（略称 TeaPot）」にてバックナンバーインターネット公開中。

URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

▼はじめに

私自身は幼児教育実践や幼児教育史に詳しいわけではないが、第二次世界大戦下の教育改革の研究を長くやってきたこともあるので、試みに、画像データを読み、あるいは検索機能を使いながら、戦時下の『幼児の教育』を概観し、その変化を読み取ってみることにしたい。

なお、記事ごとに別データとなっていて、多数の記事を読むことがそれほど容易ではないことから、ここでの「戦時下」は一九四〇（昭和15）年以降に限定することにした。

▼ページ数の減少

『幼児の教育』（以下「本誌」と表記する）は一九四四年十二月の第四十四巻第十一号を出してから一九四六年十月に第四十五巻第一号を出すまで、一年九か月

にわたり休刊した。突然の休刊ではあったが、ページ数の変化を見れば、紙の確保などの事情で発刊そのものが困難になりつつあったことがわかる。ネットの各号の目次には、その号全体と各記事の最初と最後のページが記載されているので、記事のページ数が簡単に把握できる。

本誌は、一九四三年までは八・九月が合併号の形で発行された。四四年は合併号という形式がなくなって、八・九月も通常通り刊行された。通常の号の平均ページ数と合併号のページ数は次のように推移した。

	〈通常号平均〉	〈合併号〉
一九四〇年	57・4ページ	91ページ
一九四一年	54・5ページ	92ページ
一九四二年	50・6ページ	80ページ
一九四三年	33・9ページ	46ページ
一九四四年	23・1ページ	

通常号も合併号も、一九四二年までは目立たない程

度のペースでページ数が減っている。四三年に入ると、第五号までは40ページ前後を保つが、第六号以降は30ページ前後となり、最後の第十二号は21ページになってしまふ。四四年には、30ページを超える号もあれば20ページに満たない号もあるという乱高下状態となり、第十号は16ページ、第十一号は19ページとなつて、以後休刊となる。休刊直前の状況は、第四十四卷第十号の倉橋惣三による「陣友音信(二三)——本誌發送の日に——」という記事の次の記載によつてある程度理解できる。

頁数は少なくなりました。資質も粗くなりました。活字も小さくしました。字詰も窮屈にしました。が、そんなことが言つていられますか。

〔中略〕

今日の雑誌は一冊と雖も、「自分の紙」で出来ているものはありません。いづれも「国の紙」を与へられて印刷しているのであります。しかもその「国の紙

が、どんなに行詰っているもの、従つて、どんなに貴重なものでありませう。わたくし共は、それをよく考へて編集しています。

▼倉橋惣三の時局に対する積極姿勢

倉橋が本誌に総計764件もの記事を寄せていることは、すでにこのシリーズの一回目(第一〇八巻第一号)の湯川嘉津美氏によつて指摘されている。戦時下においても記事数は多いが、それ以上に、時局に対する積極的な姿勢という点でも目立っている。たとえば次のような記事である。

- ・ 幼児と俱に皇紀二千六百年を迎ふ(一九四〇年第一号)
- ・ 国民幼稚園を目ざして(一九四〇年第八・九号)
- ・ 動員せられた幼稚園(一九四〇年第十号)
- ・ 国民幼稚園の名に於て(一九四二年第二号、第六号、第十号)
- ・ 戦時下幼稚園の任務(一九四二年第一号)

- ・ 戦時国民幼稚園(一九四二年第二号、第十二号)
 - ・ 明治天皇御製(一九四三年第一号、第十二号)
 - ・ 戦時保育の本義と実際―昭和十八年八月戦時保育講習会講義筆記―(一九四三年第八・九号、第十二号)
 - ・ 戦時保姆の職責の重化と拡大(一九四四年第五号)
 - ・ 子等と共に戦果を聴く(一九四四年第一号)
 - ・ 飛行機をつくる子等(一九四四年第三号)
 - ・ 敵(一九四四年第六号)
 - ・ 幼児に対する時局教育(一九四四年第九号)
- 一九四三年の第一号から一九四四年の第六号まで巻頭ページが設定された。その巻頭記事はすべて倉橋が執筆した。一九四三年中は「明治天皇御製」(明治天皇作の和歌をやや時局に引きつけつつ紹介、解説した文章)の連載で、一九四四年に入ると、右に挙げた「子等と共に戦果を聴く」など、毎回タイトルを変えての短文になる。「明治天皇御製」などは、それほど過激な記事ではないが、この倉橋の毎号の巻頭ページの上部、

ける幼稚園の重要性」、一九四四年第一号2ページ、下村は東京女子高等師範学校長」といった幼稚園の時局に対する有用性が強調された。

大学などの研究機関に対しては、戦時動員の 일환として科学動員が実施されたが、それに合わせて幼児教育（保育）にも科学を導入しようとする議論が現れた。

「科学」が含まれるタイトルを検索すると全部で22件の記事がヒットする（「図画科学理」でヒットする1件を除く）。このうち10件が一九四〇年代に刊行された号に収録されている。次の通りである。

- ・「科学教育と幼稚園座談会」（一九四一年第三・四号）
- ・岩松多吉「科学的芽生えを重んずる遊びのいろいろ」（一九四三年第四・五号、岩松は東京市文海幼稚園長）

・有元石太郎「幼児の科学指導の理論と実際 戦時下の観察部について」（一九四三年第十二号、有元は東京都立武蔵高等女学校の所属）

・清水虎雄「幼児への科学教育」（一九四四年第一号、清

水は文部省科学局長

・有元「経験的興味時代に於ける 幼児の科学疑問の調査」（一九四四年第二号）

・有元「幼児の科学疑問調査（二）六歳幼児の部」（一九四四年第三号）

・有元「幼児科学疑問の心理的考察」（一九四四年第四号）

・有元「皇国民錬成と幼児の科学教育」（一九四四年第五号）

一九二〇年代前半に1件あって、以後四〇年代まで「科学」を含む記事はない。やはり科学動員体制への幼児教育（保育）の貢献のアピールという文脈で理解されるべき現象である。

ちなみに、戦時下には小学校の国民学校への転換などの改革が行われたが、その原案を作ったのは一九三七（昭和12）年十二月に内閣に設置された教育審議会であった。同審議会は三八年十二月に幼稚園改革につ

いても答申した。答申では「簡易ナル幼稚園」を認める、保育において保健や躰を重視する、幼稚園と家庭との関係を緊密化する、といった方策を提言した。下村校長も委員として深くかかわったが、「国民幼稚園」や科学の重視などは盛り込まれなかった。「簡易ナル幼稚園」は女性の就労を促すための託児所的な施設である。

▼おわりに

戦時下の記事を概観してみると、倉橋ら日本幼稚園協会関係者が、幼稚園、幼児教育（保育）、そしてこの『幼児の教育』誌そのものの生き残りのために努力していた姿が浮かび上がる。倉橋の時局迎合的な論の展開も、その文脈で理解できる面が大きいだろう。

しかし、幼児教育（保育）は、もともと直接的な成果や有用性が現れにくいものである。科学教育にしても、それまで論じてこなかったことを突然言い出したという印象がぬぐえない。「国民幼稚園」に至ってはま

ったく説得力がない。国民学校は「私立国民学校」の存在を否定して（私立小学校を排除して）スタートしたが幼稚園の三分の二は私立だった。しかも一九四一（昭和16）年によく五歳児就園率が10%に達した状態である。幼稚園を「国民幼稚園」にしたところで国民学校と同様の機能を發揮できないことは、あまりにも歴然としていた。

ネット上の検索で、『幼児の教育』誌の個々の記事の内容はもちろん、雑誌としての論調や性格の変化などもある程度読み取れることが確認できた。記事単位でデータ化されていることによる限界、何度もクリックしなければならぬ煩わしさなど、難点がないわけではないが、資料として多くの人が平等に共有できるだけでも大きなメリットである。さらに多くの雑誌が同様に公開されることを期待したい。

（お茶の水女子大学教授 教育史）

あの町 この街

このコーナーでは、いろいろな地域の保育の様子をご紹介します。

雪国の幼稚園から

青森県弘前市の雪遊びの様子をお届けします。

当地では例年数十cm、

多い時には1mに達する積雪があり、

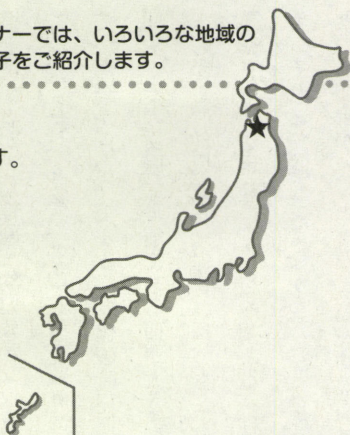
子どもたちも吹雪の時などは

室内に閉じこめられます。

でも、天気のよい日には

元気に外に飛び出し、

雪遊びを楽しみます。



雪をソリで運んで、積み上げて、山を作ります。
何ととってもおもしろいのは、雪山から滑り降りること。



さあ、できた！
すべろう

ゆきあそび
たのしかったね！



(弘前大学教育学部附属幼稚園 肥田野 豊)

音を刻む・思いを刻む

佐藤寛子

一月。年長組の三学期が始まった。四月からの小学校の生活も少しずつ見えてきて、ドキドキしながらも期待している子どもたちの様子が伝わってくる。

幼稚園での残りの二か月半、子どもたちと一緒にどのような生活をつくっていくのか。幼児期の大切な時間、彼らに何を残すことができるのだろうか。

冬休みを終え、元気に登園してきた子どもたちは、そんな私の思いを知ってか知らずにか、変わらずにいまを生きるエネルギーに満ちていた。

音を探す

正月気分も少しずつ薄らいできた一月末のことである。A子は、カセットから流れるお気に入りの曲に合わせて、リズムを叩き始めた。両手に持つのは菜箸。A子の周りには、ステンレスのポウル、フライパン、洗面器などが程よい間隔で並べられている。

A子が保育室にあるものを叩いては、音を確認する

ような遊びを始めたのは、二学期の運動会が終わった
ころからだった。

「せんせい、棒の先にさ、丸いのついてるのがあるで
しょ。木琴とか叩くやつ。あれ、作りたいんだけど手
伝ってくれないかな？」

と、ある日、A子が言ってきた。

やりたいことがあると黙って自分で行い、教師に手
伝ってほしいと伝えてくることなどほとんどなかった
A子が、突然言い出したことに驚いた。何がしたいの
か興味があったが、とりあえず何も聞かずに、一緒に
作り始めた。

試行錯誤の末、太めの竹ひごの先にちり紙を硬く丸
めたものをつけ、ビニールテープで巻いて固定するこ
とにした。園にある本物の木琴のバチの先は、黒や茶
色など渋い色味のものが多かった。A子の好きなピン
クのビニールテープを使ったことで、かわいらしい雰
囲気のパチに仕上がった。A子は気に入った様子で、
両手に持つとうれしそうに跳びはねた。

その後、A子は、積み木や空き箱、空き缶などを、
その手作りのバチで叩いては、音を確かめ、気に入った
音がすると、自分の引き出しにしまつて帰った。

翌日登園すると、引き出しから、集めた物を取り出
し、自分の周りに並べては、かなり長い時間リズムよ
く叩いて過ごす。その姿はまるで本物のドラマーのよ
うだった。

A子の熱中する様子に気づいたB子が、

「せんせい、私もAちゃんみたいなバチ作りたい！」
と加わった。A子と私とで手伝いながら、色違いのバ
チが完成する。

それからは、A子とB子二人でバチを持ち、空き箱
や空き缶、積み木以外にも、壁や扉、床などを叩き、
気に入った音やリズムを見つけ、楽しむようになって
いった。二人の様子を見て、ステンレスのポウルや小
さなフライパンなど、叩くときれいな音がするものを
幾つか用意した。A子は、バチで叩いて音を確かめ、
気に入ると、自分のドラムセットに加えた。

カセットから流れるデイズニーのメドレーや、少し前にCMで流れていた「オペラディ・オペラダ」の曲がA子のお気に入りだった。曲に合わせて叩くようになって、周囲の子どもたちも一緒に楽しむようになった。観客席を作ったり、訪れた小さい組のお客さんに、ドラムの音楽と一緒にケーキを振る舞う喫茶店もできたりと、A子のドラムを中心に、遊びの輪が広がっていった。

冬休みが明けた三学期、私は、A子のこの遊びが続いていくことを願った。そんな私の思いを察して、養護教諭はいらなくなったほうろくの洗面器や足ペダルでふたの開け閉めができるゴミ箱など、保健室で不用になったものを分けてくれた。副園長も、いまは使わないからと、自宅の練習用のドラムセットを園に持ってきてくれた。

もちろん、休みをはさんで新たな気持ちで登園してくるかもしれないA子の心もちを大事にしようと思っ

ていたが、新しい魅力的なものが刺激になって、二期の遊びからさらにA子の世界が広がっていくとよいと考えていた。A子の音探し、音作りにもう少しかわりたいたい。この遊びを通して、A子が表現しているメッセージは何なのかを受け止めたいと考えた。

音を気にする

昨年度の四月に入園してきたA子は、両親の仕事の関係で、送り迎えは祖母やシッターさんであることが多かった。入園当初から、かたくななまでに自分のことは自分でしようという気持ちの強い子で、身じたくなどを私が手伝おうとしても、「一人でできるから！」と時間がかかっても自分でやろうとした。「一人でできるんだ」と思うことで、自分自身を必死に支えているようだった。

四歳児の四月は、進級児でさえも、保育室が変わり、担任も替わり、てんやわんやである。進級児、新入児が混ざったの33名のクラス。みんなが安心して落ち着

いて集うことができるまでには時間がかかった。

「せんせい、やっつ〜」という声。もめ事が起こってドタバタしている物音。私もその渦中において、音には無感覚になっていた。そんな最中に、

「うるさ〜い！」とA子が叫んだのだ。

どんな物音よりも大きな声に、クラスのほかの子どもたちも驚き、みんなでA子を見た。A子は両手で両耳をふさぎ、

「うるさいから、静かにして！」ともう一度叫んだ。

その後も、お弁当の時などに、みんなが伝えたいことがあって一斉に話したりすると、A子は決まって、「うるさ〜い！」と大声を出した。帰りの集まりにみんなを歌う時も同じだった。ハーモニ―とはほど遠い歌声であったことは事実だが……。

園の生活とA子の家庭の生活とは、おそらく雲泥の差だったのだろう。けれど、ほかの子どもたちの中にも同じような環境の人はたくさんいるはずだ。みんなが一斉に主張しているかのように言葉や物音を発する

中で、A子はいったい何を感じていたのだろうか。

クラスが落ち着き始めてくると同時にA子の「うるさ〜い！」もいつしか聞かれなくなり、私はあのころのことをすっかり忘れていた。

音を刻む

手作りのバチは冬休みに家に持ち帰ったまま持つてくることはなかったが、たまたま見つけた菜箸で、A子は三学期に入ってもまた、音を鳴らし始めた。A子に相談してから出そうと決めていた足ペダルつきのゴミ箱、練習用のドラムセットを見て、A子は、「すごい！ いいね〜」と目を輝かせた。

「つるすと音が変わるのよ」とフライパンや、ポウルにひもを付けてつるしてみることを私から提案。さらに雰囲気が出るように、幼稚園にある古い人形劇の舞台を利用した。周りの子どもたちも興味をもってかわり、置き場所やつるす位置、ひもの長さなどを、ワ

イワイ言いながらみんなで考えた。

ピアノやカセットテープの音楽に合わせて、まずは、A子がバチを振るう。拍をとるように叩いたり、強弱をつけてみたり、曲に合わせて、気持ちをこめて演奏していることが伝わってくる。

ほかの子どもたちもA子の気持ちを受けて、曲に合わせてリズムを奏で始めた。

A子は、やりたいと言って加わってきた友達には快く場を譲ったが、興味はあるものの、半分冷やかしのような感じで乱暴に音を鳴らす人には、容赦せず、強い口調で追いついた。

自分の音を見つけ、刻むことで、自分の気持ち、自分の存在をみんなに伝えている。そんな感じがA子の表現から伝わってきた。

一月の末から二月にかけて、保育室にできた小さなライブハウスには、連日、小さい組のお客さんが足を運んでくれた。



▲小さなライブハウス

暗くしたほうが雰囲気が出るからと、誰かが気を利用して電気を消したことがきっかけで、スポットライトを使ったり、OHPで天井に絵を写したりと、粋な

演出が加わった。A子たちのバンド演奏をバックに、独唱する人、客引きや司会をする人も現れ、子どもたち一人ひとりの思いが重なった。時には、かなり騒々しい雰囲気になったのだが、そんな中、A子が気持ちよさそうに音を刻む姿が印象的だった。

思いを刻む

A子の音探しに一緒にかわりながら、年中組の時の彼女の姿がふと思い出された。周りの子どもたちも思いであふれた音の塊の中で、「一人でできる」と頑張っていたA子の心は、押しつぶされそうだったのかもしれない。「うるさ〜い！」と叫ぶことで、かき消されそうな自分の存在を、懸命に伝えようとしていたのか、もしれない。コツコツと自分の音を探し、規則正しく、時には力強くリズムを刻むことは、自分の存在を自分で確かめていく作業だったのだろう。そして、それは同時に、相手の音を、相手の声、思いとして受け止めていくうえで大事な基盤になっていった。それぞれ

に主張し合った音同士はなかなか調和できないが、音同士が響き合い、重なり合った時は、美しいハーモニーを生み出す。「みんなで気持ちよく暮らすということは、そういうことなのだ」と、A子を通して改めて感じた。

幼児期は、子どもたち一人ひとりが自分の好きなことを見つけ、じっくり取り組むことができる時間を十分に保証したい。緩やかな時間の中で、子どもたちが自ら始めた遊びには、すべて意味があると思うからだ。そして、その遊びに保育者がいねいに向き合うことは、一人ひとりの思いに寄り添い受け止めるだけにとどまらず、共に暮らす周りの子どもたちの思いと重なり、つながっていくことになるだろう。

子どもたちが遊びの中で自分の思いをしっかり刻むことができるよう、そして、周りの人と思いを重ねながら生きる豊かさを十分に味わうことができるよう、幼児期の大事な時間を私も共に過ごしていきたいと思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(37)〉

「クラーゲス輪読会」が与えてくれたもの

佐治 恵

「輪読会」という近づき方

お茶の水女子大学の幼保プロジェクト（「幼・保・大」連携研究プロジェクト）では、構成メンバーの教員が自由に展開する「自主ゼミ」を設けています。菊地知子・佐治由美子主宰の通称「クラーゲス輪読会」に「時間があつたら出てみない？」と誘われたのは、輪読会も何回か進み、後半にさしかかるころでした。男性が一人加われば、ちよつと違った展開が期待できそうということだったのかもしれませんが。

テキストは二十世紀前半のドイツの民間哲学者ルートヴィヒクラーゲスの著書『リズムの本質』。原著は一九三三年にドイツで出版され、日本語訳は一九七一年に杉浦實訳でみず書房から出版されました。黒・灰・白の四角い形が、さざ波が打ち寄せるように並ぶパウルクレーの絵「律動的な」が印象的に表紙を飾る本で、いまも書店で手に入ります。本文百ページ足らず、流し読みすればすぐに通過してしまうほどの小さな、しかし不思議な力をもった書物です。

ずいぶん昔、学生のあるところ一度読んだことがあります。

内容はほとんど忘れても、読んだときの魅了された感覚だけは残っている本というものがあ、これは確かにそうした類たぐいの一冊でした。決して煽動的というわけではないのですが、読む者のからだの内側に直接訴えかけてくるような、情熱的な語り口なのです。

「自然は、宇宙のもっともはるかな星雲塊かひやうずまき星雲から、極微のバクテリアあるいは原生動物にいたるまで、つねにすみずみまで形のととのった姿をしている。それを混乱かくさせ、攪乱かくし、しばしばまったくの混沌状態に陥らせる仕事人間のために残されていた！」(第二章、訳文は適宜変更しています)

たとえばこんなふう。一人で読むと「わかったような気になつてしまふ」タイプの典型的な本でしょう。「クラークス輪読会」に参加してすぐ気づいたのは、輪読会というやり方にはこういう「わかつたつもり」

を防ぐ効用があるということでした。交替で音読しながら、途中で参加者(中心になるのは、保育周辺分野への関心を持続させ、目配りし続けている大学院生の人たちです)が自由に発言して自分の読み方を提示したり、疑問点を出したりしながら進める輪読会の場で、読み手は「ひとり読み」の危うさから守られ、また複数の参加者の読みを重ねることで一定の客観性ないし公共性も確保されます。あらかじめ責任を負う報告者を立てて読み進めるゼミ形式に比べると、緻密さに欠ける弱点はあるかもしれませんが、全員で本文を追っていく輪読会には、報告を聞いただけで自分も読んだ気になつてしまうような危険を避けるという効果もあるでしょう。言ってみれば主観的な思い込み(『論語』のことはを思い浮かべるなら「思いて学ばざればすなわち殆あやうし」と、客観的な思い込み(「学びて思わざればすなわち罔まし」)の両方の危険からわが身を守ってくれる、なかなか効果的なアプローチなのでした。

「反復」と「更新」

さて、本書のテーマは「リズム」です。だれでも知っている、あの「リズム」というものです。日本語では「律動」、辞書的に言えば「規則的に繰り返される動き」のこと。幼児教育の場でも「音楽リズム」などのことは日常的に使われているはずで、だれもがすでに熟知し、あたりまえに使いこなしていることでしょう。ならばこの本は、「生活の中や教育の場にリズムを有効に取り入れよう」というような趣旨で書かれているのかと言えば、その予測はあっさりと裏切られます。クラークスはこの既知のことばに新鮮で大胆な接近を試みます。リズムは決して「規則的な繰り返し」などではないと。

「拍子が同一者の反復だとするならば、リズムは類似者の再帰だといわねばならない。類似者の再帰は

過ぎ去ったものの更新を表すので、端的に「拍子は反復し、リズムは更新する」ということができる」

(第六章)

本書の核心部というべき箇所を縮めて引用しました。面食らわされる言い方ですが、ここでクラークスは人間のつくり出す拍子ひょうし(タクト)と自然界に息づくリズムを対比して、両者は全く違うものだと言調するので、人間が生み出す規則的な(たとえばメトロノームの)「拍子」は、機械でつくられたような生命力を欠いた「同じものの反復」をもちただけですが、自然界に息づく「リズム」は(前のものと似てはいるが)そのつど微妙に異なる、新たに生み出され、命を吹きこまれた「類似するものの更新」なのだといふのです。辞書的な「規則的に繰り返される動き」というのとは全く違う、いやむしろ正反対の定義をガツンとぶつけられました。

「常識を疑うこと」、あるいは「未知の経験に対していつもみずからを開き、受け入れること」。ものを考えるときの構えとして、哲学が求め続けてきたことです。それを文字通り遂行しているクラークスにならって、読む私たちも自分の「常識崩し」をしなければならぬようです。

一見したところでは単なる繰り返しのように見えても、実はいちいち新しい、一回一回に異なるものが到来してくる、やってくる、という経験。この事態に対して、クラークスはまるで初めて使うかのように、新鮮な気持ちで「リズム」ということを名指し、あげがいました。私たちも新鮮な気持ちで「リズム」をもう一度自分のことばにしなければなりません。

ガラス絵の経験から

何人が集まってテキストを読んでいると、こういうときがおもしろいのです。みな難しそうな、わから

なような顔をしています。内容が難解だとか、文章が晦渋かいじつだとかいうせいも多少はあるかもしれませんが。しかし、この「反復と更新」の箇所に出あったときの参加者のようすは、単に処理しきれない難しいものにつかつた無力感のようなものとひと味違う、何か手応えのあるものに向かって手探りする姿のように見えました。

私の記憶では、このとき参加者はみな、まずは自分の中にあつたこれまでの「リズム」のイメージを消し去ろうとしているようでした。自分でこうだと思つていたリズムの場面を頭から振り払い、次いでクラークスのことばにあつた「類似者の再帰」ないし「類似するものの更新」に該当する事態を探すのです。どうやら一人ひとり、それぞれの保育経験の場面をよみがえらせようとしていたのです。

ふとだが、ナーサリー（お茶の水女子大学附属いずみナーサリー）のガラス絵制作のことを話題にし

ました。透き通った大きなガラス窓に、だれかが水彩
絵の具で何かを描く……、そこに別の子が重ねて描き
加える……、保育者もちよつと手を出して反対側から
手を入れてみる……。こうしてできあがったガラス絵
は、紙に描いた絵とは違って、おのずと共同制作の作
品になります。

おもしろいのは、紙に描いた絵の上から重ね描きさ
れば怒る子たちが、ガラス絵では怒るところか、自
分の描いた線や塗った色が、ほかの人の手が加わるこ
とに上の層の線や色の下に隠されていくのを、むしろ
おもしろそうに見ていたというようすです。単層では
透明に見えたものが、幾重にも重複し、重層を成して
色彩感を増していく、その変化のありさまを楽しんで
いるのです。

これは一見、リズムとは無関係のことのように見え
ます。でも「類似するものの更新」、前のものと似ては
いるが新たに生命を吹き込まれたかたちとしてのリズ

ムのあり方が、文字通りここに見られるのではないで
しょうか。ガラス絵が通常の絵画制作とは異なるよ
ろこびを与えてくれる理由は、それがリズムとして生命
性を有しているからであるように思います。自分が初
めに感受していたリズムが、ほかの人のリズムと重
なって、あるいは同調して「更新」され、「再帰」し
てくるのです。

リズムは異質な世界をつなぐ

リズムは音や振動を通じて私たちの聴覚に訴える
とともに、さざ波のうち寄せや木の葉の葉脈の模様など
を通じて視覚にもその運動を伝えます。前者は時間の
中に現れるリズムであり、後者は空間の中に現れるリ
ズムとして一応区別できるでしょう（第七章要約）。

右のガラス絵の例などは、典型的に空間におけるリズ
ムというわけです。

時間と空間にともにリズムが現れるということから、

少しこの本の記述を離れて考えてみます。ふつう私たちは、時間と空間は異なる次元にあり、両者を混同してはならないと考えます。クラীগスは、そんなことではない、時間と空間は、実はひとつながりのもので、私たちはその間を自在に行き来してよいのだと言いたいようです。異質な世界をひとつにつなげているのが「リズム」なのだ。「リズム」に導かれて人は時間と空間を別のことでなく、一挙に感じうるのだと。

時間と空間だけでなく、音と色、熱さと重さなどの感覚対象の次元でも、また、聴覚と視覚、嗅覚・味覚と触覚などの五感の機能の次元でも、一見バラバラのものをひとつにする働きをリズムはもつのです。異なる感覚をひとつに結びつけて、何かしら全体的なあるいは全身的な経験と言うべき事態が起こるとする、それを可能にさせている力、これを「リズム」と呼び換えたらクラীগスから逸脱するでしょうか。

語り合いの中で、ナーサリーの子どもたちの遊びの

ようすも話題になりました。ひとつの部屋の中で、いくつかのコーナーに分かれてそれぞれの遊びを遊んでいる子どもたちが、ふと気づくと別のコーナーをおとずれてそちらの遊びに入り込んでいます。自在に、たゆたうように、あちらとこちらの異なる世界が交換される（あるいは「交感する」と書いたほうが適切でしょうか）ように。

そのとき、部屋にはバラバラに過ごす子どもたちがいたのではなく、その「場」を貫く「リズム」によって、ひとつの全体となった空間と時間の中に住まう子どもたちがいたのです。このリズムの力は、子どもと大人という異なる世界の住人の中にも両者を貫くように等しく働いているでしょう。この力の助けを借りて、子どもと大人はたがいに共有する世界を実現し、ひとつの経験を享有することができるのではないのでしょうか。

（塾勤務・日曜哲学者）

編集後記

皆様、明けましておめでとうございます。
遊び・環境をキーワードとする幼稚園教育要領改訂告示（平成元年）から21年目。人間なら今月が成人式です。家庭および幼稚園の有意義な連携と質の高い保育が発揮される時機は熟したのでしょうか。

今年、本誌は「いま、倉橋と出会う」と題して、55年前に亡くなった倉橋の保育論に「いま」の視点から接近する試みの特集します。毎号その独特の言葉やフレーズを取り上げ、「クラハシって誰？」という若い方にも興味をもっていただけるような内容にしようと編集スタッフ一同張り切っています。また、津守真先生の本誌連載と対話した『新しく生きる—津守真と保育を語る—』が、12月に発行されました。併せてお読みいただければ幸いです。（H）

幼児の教育 第109巻 第1号

平成22年1月1日発行
編集兼発行人 浜口順子
編集担当 金子めぐみ
発行所 日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所 株式会社フレーベル館
☎03-5395-6604（編集）
振替 00190-2-19640
印刷所 図書印刷株式会社
定価 550円（本体524円）
©日本幼稚園協会 2010 Printed in Japan

編集協力 フレーベル館
表紙絵 後宮ひろみ
扉題字 津守 真
本文カット 田崎トシ子
編集スタッフ 高橋陽子
佐藤寛子

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613（営業）

次号予告

〈特集〉いま、倉橋と出会う（2）「まめやかさ」

●インタビュー2 ● 津守 真・津守房江（聞き手／江波諄子）

立川多恵子・矢萩恭子

◇巻頭言◇ 藤永 保

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。

ご意見・ご感想大募集

『幼児の教育』バックナンバーのネット公開開始まりました！
お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション”TeaPot”
<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/> へアクセスしてご覧下さい。
明治34年発行の創刊号から発行後2年以上たったものまで、順次公開していく予定。
ご意見ご感想などは、youjimap@yahoocopy.jp までお寄せ下さい。

好評発売中

保育の計画・記録・評価でお困りの先生、計画作成でスキルアップを目指す先生におすすめの1冊です！

すぐに役立つ！ 保育の計画・記録・評価

計画作成 - CD-ROMソフト付

監修／網野武博 編著者／寺田清美・田中浩二

新保育所保育指針に基づいた、保育課程編成、指導計画の作成、各種計画・記録など順を追って解説し、体系的な理解を促し、CD-ROMソフトを使ってさまざまな計画が作成できます。



●簡易ソフト

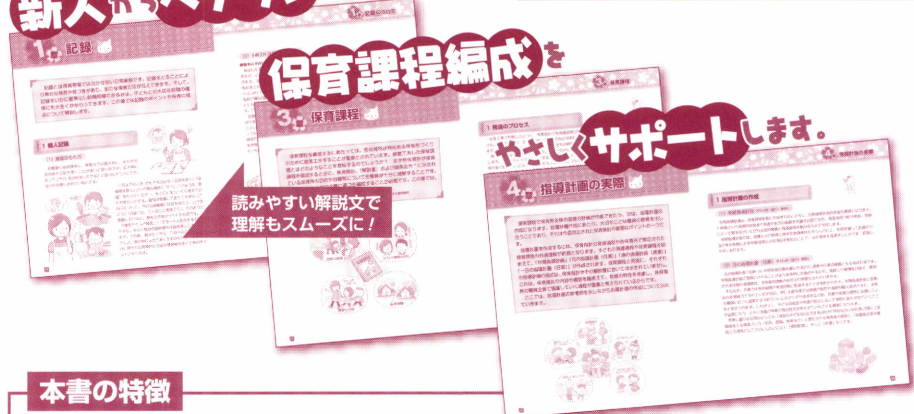
「パソコンで作る保育の計画と記録」



10911

新人からベテランまで

26×21cm 120ページ 定価3,990円(税込)



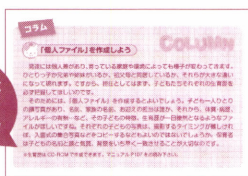
読みやすい解説文で理解もスムーズに！

やさしくサポートします。

本書の特徴

- ① 保育所保育指針改定のポイントをズバリ解説！
- ② 日々の保育と結びつくわかりやすい解説文！
- ③ 簡易ソフトと解説で計画作成がさらにスムーズに！！

難しいところはコラムでわかりやすく！



キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

平成21年4月実施の
「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」に完全対応！
最新の「保育の動向」がわかる「保育学」の決定版！

「保育の基本」から「保育の全体」が、
この1冊でよくわかる！

改訂新版
現代保育学入門

諏訪きぬ／編著

「保育の基本」から「保育の全体」を捉え、好評だった『New 現代保育学入門』が、最新情報を取り入れた内容になり、さらに使いやすくなりました。「保育学」を学ぶ“みちるべ”道標”として、保育現場はもちろん、テキスト・補助教材にも大いに活用できます。

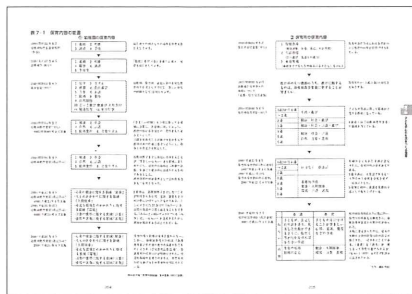
21×15cm 308ページ 定価2,100円(税込)



36302

— もくじ —

- はじめに
- 第1章 子どもと出会うということ
 - 第2章 子育てにおける家庭・社会の役割
 - 第3章 家族・家庭のあり方と保育サポート
 - 第4章 保育者になるということ
 - 第5章 日本の幼稚園・保育所の歩み
 - 第6章 「育つ」と「育てる」のあいだ
 - 第7章 子ども中心の生活をつくる保育
 - 第8章 保育の見通しを立てるということ
 - 第9章 先人が保育・教育について考えたこと
 - 第10章 21世紀の保育の創造と保育の課題
- おわりに



キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。